

第 14 部 ソフトウェアの再利用

構造化設計でのプログラムの設計方法が広がって、プログラムをモジュールの組み合わせで作成するようになった。このモジュールを再利用、つまりある所で作成したモジュールを同じ機能が必要な別のところで使うことができれば、まず生産性の面で効果があり、さらにそのモジュールが十分にテスト済みであれば信頼性の面でも効果があることが明らかである。開発の期間も短縮でき、開発の費用も抑えることができる。

従って多くのプログラマは、汎用性があると考えるモジュールのソース・プログラムを確保しておき、それを別の使える所で使うということをずっと以前から行って、それなりの効果を上げてきた。端的にいえば、これがソフトウェアの再利用の原型である。

しかし、この再利用をプログラマ個人のレベルから組織全体に広げること、及び対象物をソース・プログラムから要件定義、設計、テストデータなど他の部分に展開することは、この時点でもできている組織はたいへんに少ない。

第 14 部では、この再利用の問題を考える。第 14 部は、第 35 章だけから構成される。

